様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：４５３０７
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2022
課題番号：２１Ｋ２０２５２

研究課題名（和文）おやじの会が地域・家族の子育て支援としてもたらす可能性についての検討

研究課題名（英文）Examination of the possibility that the oyaji's association will bring about child-rearing support for the community and family

研究代表者
清水　憲志（SHIMIZU, Kenji）

中国短期大学・その他部局等・講師（移行）

研究者番号：２０６０９７３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、おやじの会が地域及び家族にもたらす影響を検討した。そのため、父親・母親・子どもにインタビューを行うとともに、おやじの会の活動の事例収集、アンケート調査を実施した。その結果、父親と子どもに留まらず母親に対しても影響を及ぼしていた。“おやじ”という名称でありながらも母親が主体として参加しているケースもあった。父親・母親・子ども達という参加者はつながりを持つことを喜んでいた。その結果、家族同士のつながりを生みだしていた。
　おやじの会は家族同士をつなげるものであり、地域という場所でつながりを生みだし、継続させていた。そのつながりは、子どもが大人になっても続いていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、おやじの会に関わる父親・母親・子どもを対象に調査を行った。おやじの会は子どものため、家族のために活動する集団である。“おやじ”という名称ではあるが、同じ価値観を持っていれば母親であろうが子どもであろうが関係なく参加していた。主体的に集まった集団であるため、何十年も継続している団体もあり、地域の子育て支援としても重要な拠点となっていた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the impact of Oyaji no Kai on the area and families. To this end, interviews were conducted with fathers, mothers, and children, case studies of Oyaji no Kai activities were collected, and a questionnaire survey was conducted. The results showed that the fathers and children were not the only ones affected by Oyaji no Kai, but also the mothers. In some cases, mothers were the main participants, even though they were called " fathers. The participants - fathers, mothers, and children - were happy to be connected. As a result, they created connections among families.
　The Oyaji no Kai was connecting families to each other, and it was creating and sustaining connections in the area. These connections continued even after the children became adults.

研究分野：社会科学

キーワード：おやじの会　父親　母親　子育て支援　家族　社会性　子ども

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

昨今、少子化や家、保育現場での虐待等様々な子どもに関わる問題があり、子育て環境の整備が求められている。おやじの会という父親主体の会がある。薄葉（2006）が定義したように、おやじの会とは、「子育て、子供との触れあい、教育、健全育成、地域貢献、自主学習、そして男どうしのお付き合い等を目的として、男性のみが集まって活動する、学区もしくは地域単位の集団」とされているように“男性のみ”が集まる会であった。おやじの会は、1983 年に神奈川県川崎市で「いたか」という名称で結成されたのが最初と言われている。由来は子どもの発した「おっ、おやじ、いたか」という言葉であり、当時の子育ての状況を表し、父親が子育てに関わっていない状況を反映している。しかし、時代の変化と共に母親が手伝いという形で参加する姿が見られるようになってきた。そして、全国おやじサミットが 2002 年に香川で開催されてから、20 年が経ち北は北海道、南は鹿児島と全国津々浦々で行われ、地域のみならず全国で“おやじ”達の交流がサミットや各会の活動の手伝いを通して行われている。

おやじの会は、全国おやじサミットでの交流を通じて、情報交換をしたり、つながりを持ったりして積極的に活動し、自分達で問題意識を明確に持ち、取り組んでいる。父親の子育て支援であることは、過去の研究からも明らかであり、全国で活動が盛んになることが望まれる。しかし、全国で活動する団体の個々に実情や実際の参加数など正確に把握しきれてない点も多い。また、子どもや家族、地域のために活動しているにもかかわらず、そういった視点での分析にも至っていない。

２．研究の目的

本研究では、おやじの会の全容を把握するために、全国的調査を行うとともに、父親、母親、子どもにアンケート調査を行い、父親の関わりにより、母親の育児不安の軽減や子どもの社会的スキル向上に寄与していることなどを明らかにする。さらに、事例研究やインタビュー調査なども行い、関わる人々、地域などにどのような効果をもたらしているのかも明らかにし、子育て支援として、新たな知見をもたらすことを期待する。

３．研究の方法

本研究では、おやじの会に焦点を当て研究を行う。

(1) 全国のおやじの会に所属する父親・母親・子どもにアンケート調査を行い、協力を得られた近隣の地域に依頼し、同様のアンケート調査を行う。
(2) おやじの会の活動に参加しながら、事例研究を行う。
(3) おやじの会に所属する父親とその子ども、妻（母親）にインタビュー調査を行う。

本研究では、一つ目におやじの会の数や参加人数など実態を調査した上で、父親の養育態度など、母親の育児不安や子どもの社会的スキルなどについても同様に調査し、おやじの会に所属していない人と比較し、存在価値の有用性を実証する。二つ目に、おやじの会の活動をビデオで記録し、TEM の手法を用いて分析し、おやじの会が持つ理論的背景を明らかにする。三つ目に、おやじの会の所属する父親とその子ども、妻にインタビューを行い KH Coder を用いて分析し、おやじの会に所属する人達が体感している効果を明らかにする。

４．研究成果

(1) おやじの会の所属の有無による違い

全国おやじサミット等を通じて、おやじの会に所属し、子どもが幼稚園から小学校に通っている子どもを対象にした結果、おやじの会に所属する人 27 名、所属していない人 32 名について、おやじの会の所属の有無によって、父親の育児行動及び柔軟性、社会的スキルについて調査した。

差があった項目は、「10. 学校の行事に参加する」と「育児行動得点」であり、おやじの会に所属している父親の方が優位に高かった。以前、清水（2011）でもその二つの結果は一緒であったが、他にも「4.子どもと一緒に外で遊ぶ」、「5.子どもと一緒に室内で遊ぶ」、「7.子どもの身の回りの世話をする」、「8.子どもの疑問にきちんと答える」も高かった。しかし、約 10 年の経過により、父親の子育てへの取り組み方に変化が起きていることが分かる。但し、おやじの会に所属している人たちの方が、行事に参加している事実は顕著なものである。そのため、おやじの会を推進する意義はあると考えられる。柔軟性及び社会的スキルについては差がなかった。

総括

過去の調査とは、違った結果となった。その要因となるのはサンプル数の違い及び社会の子育てに関する価値観の変容が影響を及ぼしていると考えられる。男性の育児休暇の推進、イクメンプロジェクトなど、父親が子育てに携わることが当たり前になっていることやワークライフバランスの観点から、労働時間の適正化という理由が考えられる。

しかし、父親が子育てに意欲的に関わっている状況は喜ばしいことであり、おやじの会に入ることにより、学校の関係者とのつながりが増え、自然と学校の行事にも父親が入れる状況をつくることが望まれる。

（2）おやじの会に関する父親がおやじの会に参加し、移行するまでの過程に関する研究

全国おやじサミットで知り合った方々にインタビュー及び事例研究に関する内容を伝え、協力を依頼した。結果父親 10 名にインタビューを行い、K 県・O 県のおやじの会の活動に参加し、事例を収集した。

①分析方法及び結果について

TEM は複線経路・等至性モデルと言われ、TEM におけるプロセスは「時間が接続する中での対象や現象の変容」というように時間がキーワードとなっており、父親が行う言葉や仕草、動作などを時系列に沿って分析できる。TEM に沿って、父親の変容を時系列で分析した。TEM に沿って、父親の変容を時系列で分析しながら、本研究が着目しているおやじの会に関わる父親の経験の過程を分析する。

TEM を用いた分析により、おやじの会に関わる父親の経験を可視化した。なお、本文中の【　】は TEM 図における時期区分名を意味する。父親達の行動の中で、行動、活動の展開が変化したと考えられる点を境に、おやじの会における父親達の経験を第一期【父親の仲間渇望期】、第二期【おやじ仲間模索期】、第三期【おやじ活動期】、第四期【家族交流期】、第五期【地域のおやじへの移行期】という 5 つの時期区分に分けた。

第一期【父親の仲間渇望期】

まず、子どもが学校等の教育及び福祉機関に所属することが始まりの一歩である。PTA に参加する中で、自分がしたい活動とのズレであったり、躍動感をもって対応することができなかったりすること、行事に参加する中で男性の数が少なく、行きにくさを感じるところから、同じ父親としての仲間を求めていたことが分かる。そして、その時おやじの会がすでにあるのか無いのか次の行動は変化する。無い場合においては、おやじの会に関わったことがある人や知っている人の存在は大きいように思う。作った人はみんな、誰から聞いたか、自分が生活する中で違う場所で活動するおやじの会の存在を知った上で作っている。そこに、自分が求めているものがあったのだろう。

第二期【おやじ仲間模索期】

次に会に参加若しくは結成し、仲間を集めていく。その際に重要になるのは“飲み会”である。すでに以前から知り合いであれば関係性の距離を近づけるのは容易ではあるが、初めて出会った人同士であれば、何かきっかけが必要である。“お酒”と言う力を借りて仲良くなれるのであれば、重要なツールと考えられる。そして、仲間関係ができていく中で、それぞれの子どもの名前と顔が一致し、父親と子ども相互が認識するようになり、話題も増えていき、関係性がより深まっていく。そして、声をかけ合うことで、自分の子どものためから知っている子どもたちのためと目的が広くなっていく。

第三期【おやじ活動期】

一つずつ活動を行う中で、それぞれの役割が生まれたり、学校との連携を必要とするようになったりして、子どもの理解も深まる。何故なら、今までは母親から聞かされた子どもの情報を直接先生や友達から聞くようになり、そこで“やりとり”ができる。そうすることで、情報の質は向上し、理解が深まることになる。しかし、気を付けておかなければいけないのが先生や友達の認識が“○○さんのお父さん”だったのが“○○さん”と一個人へと変化することである。その変化が多感な時期の子どもにとって、複雑な心境をもたらすことになるケースもあった。そのため、普段から子どもとやり取りをする中で、我が子の気質や成果など十分に理解したうえで、関係性を保てるように振る舞うことが求められる。

第四期【家族交流期】

父親と子どもが繋がっていく中で、自然と母親も関わる事が増えていく。関わり方はそれぞれの家族の形に応じてあるが、家族同士を認識し合う段階になり、コミュニケーションの輪が広がっていく。その中で、家族同士が関わる事も増え、会の活動以外の場においても出会えば挨拶やコミュニケーションを取るようになる。父親が関わったことで、家族と家族をつなげるのは容易なことになる。何故なら元から、母と子ども同士はつながっていることが多い。母親は、子どもが父親と参加する様子を見に来ることも多いため、そこで父と子の出会いが生まれてもすぐにつながり、回数を重ねる中でより強固なものになる。この、家族でつながった絆は地域の住人にとって重要なものである。

第五期【地域のおやじへの移行期】

子どもの卒業に伴い、OB になるケース、辞めてしまうケース、若しくは地域のおやじの会へと移行し、継続して関わるケースと様々なことが起こり得ている。しかし、おやじの会に関わらなくなったとしても、そこで、出会ったつながりは消えることは無い。その後も地域に住民として関わりは継続している。派生的に地域のおやじの会へと移行しているのであれば、その役割はさらに重要なことになるが、仲間と共に行う活動であれば無理な事ではない。

②総括

おやじの会に参加している父親について時系列に伴って分析した結果、共通する部分が往々にしてみることができた。やはり、おやじの会は、父親と子どもだけのものではなく、家族で関わる場所である。また、学校、地域問わず関わることができ、それぞれの場所でルールは弾力的に運用していることが分かった。

この時系列は単年のものではない。そこに至るまでの時間はそれぞれの関わった時期によって違いはあるが、そこの道筋をたどることに違いはない。その道が親を育て、子を育てる道のりであることは違いがない。

（3）父親・母親・子どもに関するインタビューの結果（KH Coder）

おやじの会に関わる父親・母親・子どもに以下の手続きを用いて、インタビューを行った。対象者は、父親が 10 名、母親が 6 名、子どもが 11 名である。

①分析方法及び結果について

インタビュー方法：半構造化面接

分析の方法：KH Coder を用いて、共起ネットワークを描き出す。共起ネットワークとは，テキストの中で用いられた語と語の関係性を示したネットワークである。本研究では、リンクを Jaccard 係数 0.1 以上の共起関係とし、分析を行った。Jaccard 係数は類似性の指標であり、単語間の共起関係を表すものとして広く使用されている。

①-1 父親の視点でおやじの会についての分析

父親に “ 参加の理由について ”、“ 参加して感じたこと ”、“ 自身の変化 ” に関することを尋ねた。その結果、3 つの共起ネットワークが描かれた。

おやじの会に入ることで、拠点としている学校区と関わる様子が如実に描かれている。自分が子どもと関わり、先生ともつながるのも過去の先行研究とも関連している部分である。また、現在の世相を反映するようにコロナについての様子も見られる。飲めるー集まるという関連が見られるのもおやじの会ならではだろう。

おやじの会に入ることで、子どもと自分が一緒になって活動する様子が垣間見える。また、地域や PTA との関わりがつながるのも印象的である。お父さんと小学校がつながるということもおやじの会の影響と言えるだろう。

“ 思う ” ということが大きく描かれている。それについては、おやじの会のこと、自分自身のこと、子どものことがつながっていることがおやじの会ならではのように思える。やはり、会の活動を通じて、それぞれのことを考え、楽しむためにはどうすればいいのか。よりよくするためにはどういう流れにするべきか。など様々なことについて、飲み会を中心とした集まりで話をしている。そして、地域を知るだけでなく、自分自身のことを地域や父親仲間の中での自分の役割を知るということも、一社会人にとって有益な事ではないだろうか。

【大人】と【楽しい】がつながっている。そこに「お母さん」もつながっているが、やはり大人が楽しんでいる姿を子どもに見せるということは将来に対して明るい展望を持つことができる。その姿を子ども達が自分の肌で直接感じる意義は社会としても大きな未来への投資へとつながるだろう。

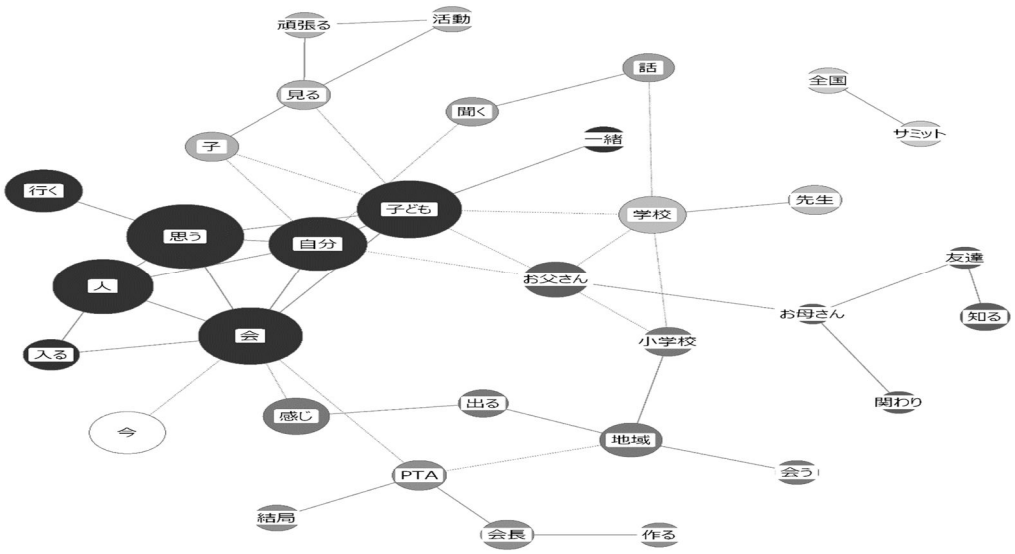

図 3-1　おやじの会に参加して感じたこと

①-2 母親の視点でおやじの会を垣間見る

母親に父親がおやじの会に参加していることについて、また、自身が関わる事について尋ねる

と 2 つの共起ネットワークが描かれた。
　父親が関わる事については、会に入り、活動していることは子育てにおいても重要な役割を示している様子が見られる。但し、おやじの会という形式上、子どものための行事に参加することは当たり前であるが、飲み会もセットのようになっている状況は否めない。おやじの会は父親が主体ではあるが、母親自身も関わっていることも多いので、おやじの会に関わる様々なことについて理解があることは、父親の視点で考えると参加しやすい。また、父親が参加せず、母親のみ参加することもある。そのケースでは、父親は飲み会の送り迎えはするが、活動自体には全く手伝わないというケースがあった。
　母親自身が関わる事についてであるが、おやじの会に関わる事で人と出会い、様々な縁ができる事が描き出されている。全国というワードから見られるように母親が主となって参加している場合、全国サミットでも交流していることが多い。小学校を卒業すると、地域へと移行しているのは、対象者の偏りがあるかもしれないが、他のおやじの会からも聞かれるケースではある。

①-3 子どもの視点でおやじの会を垣間見る
　おやじの会に関わる父親について子どもが感じたことは、父親について感じる部分が増えるとともに、楽しいという面や多感な時期故に頻繁に学校へ来ることに対して恥じらいを持つケースなど様々である。しかし、父親について好意的に思っていたり、一緒に遊ぶことが楽しかったりなど総じて良好な印象である。その父親の姿があるからこそ、今の自分自身があること、ここに至るまでに影響は受けたことが分かる。やはり、おやじの背中を子ども達に見せ、共に活動する意義は、将来の大人像に対しても大きな良い影響を与えていると考えられる。そこで、様々な家族と出会い、家族の在り方を知る意義も大きいだろう。
　子ども達にとっておやじの会とは、父親と行く場所であり、普段見せる父親と違う一面を垣間見たり、様々な年上の人と関わったりする場である。印象的なのは、“父親と行く場所”である、母親は“来る”場所であるということが、子どもにとっても重要な意味をもっているのではないだろうか。おやじの会に限っては、父親と行くことが中心であり、その父親と関わっている様子を母親は見に来るのである。その、家族の関係性は今後も普及されるべき点ではないだろうか。
　父親と参加した行事において、同級生の友達や異年齢の友達と関わる事になることも、父親達が意図したことであり、子どもの視点からもそれが事実として見えたことは意義深い。
　そして、“相談”という言葉があるが、インタビューの中でも、自分の親に相談するのではなく、おやじの会で関係のある、知り合いの父親に相談するケースも見られた。個別に飲みに行くこともあり、子ども時代につながった絆が時を経てもつながっていることは、おやじの会が持続可能なものであることを意味づける一つの理由であると考えられる。

②総括
　それぞれの視点でおやじの会について概観してきたが、父親と子どもだけに影響を及ぼしているのではない。母親も含め家族に影響を与えている。そして、会の行事は学校と言う場所に縛られるかもしれないが、そこでつながった絆は切れることなく継続している。その絆が次の世代へと継承されるのであれば、おやじの会の意味は、これまで認識されていた“父親の子育て支援”という位置づけから、“持続可能な家族の子育て支援”と改める必要性があるだろう。
　おやじの会の可能性は、まだ秘めたものがあり、有益な場所であることが十分に理解できた。父親が中心となりながらも、同じ思いを持つ同士が関わり、未来へとつなげる関係性を紡いでいくことが望まれる。

（4）おやじの会が家族・地域にもたらした子育て支援としての効果
　子どもが学校という場所に入ったことでおやじの会と出会うきっかけをもらう。子どもがもたらしてくれた縁を基に、親達は成長するきっかけを得る。子どもがきっかけとなってもたらしたことによって、父親達を中心とした“家族”はおやじの会という居場所を得る。そして、その居場所が“仲間”と“役割”をもたらす。その居場所は、活動を行う中で、居場所に属する人を増やしていった。最初は関わる父と子どもだけだったものが、母親も関心を持つようになり、学校及び地域に住む人々の中で興味を持つ新たな家族も参加するようになる。居場所としての安心感は関わり方によって個人差はあるが、それぞれにとっての“役割”を持っていた。
　家族として相互に思い合う場所だからこそ、おやじの会に関わる人達は数年にもわたって関わり続けているのではないだろう。
　そこに、今日まで魅了され続ける理由があり、年数と共に関係性はより味わい深いものに醸成されていると考えられる。子育てに限らず、地域に生きる者達にとって“重要な居場所”をもたらしていた。その縁は子育てが終わっても切れることは無い持続可能な場所である。つまり、おやじの会とは、子育て支援に留まらず、地域に住む人々にとっての社会資源になっている。持続可能な地域にするための可能性をもたらしている。

【引用文献】
薄葉豊（2006）おやじたちは今―「おやじの会」に見る男縁の再構築―.東北人類学論壇,5,
　52-69.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 清水憲志	４．巻 5
２．論文標題 おやじの会を“母親”の視点で紐解く	５．発行年 2023年
３．雑誌名 WEBジャーナル	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 清水憲志
２．発表標題 おやじの会が「父親」以外にもたらす可能性の検討 ーおやじの会におけるESDー
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 清水憲志
２．発表標題 おやじの会に学ぶ子育て支援の在り方 －在学中に学ぶ保護者との協働について－
３．学会等名 日本保育者養成教育学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 清水憲志
２．発表標題 おやじの会が子育て支援として子どもに与える可能性
３．学会等名 日本乳幼児教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 清水憲志
２．発表標題 母親にとっておやじの会が及ぼす影響に関する一考察
３．学会等名 日本子育て学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関